

京都・遠所遺跡

えんじょ



(網野・宮津)

- 1 所在地 京都府竹野郡弥栄町木橋小字遠所ほか
- 2 調査期間 一九九一年(平3)四月～一九九二年二月
- 3 発掘機関 勅京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 4 調査担当者 増田孝彦・岡崎研一
- 5 遺跡の種類 生産遺跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 五世紀末～十三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

遠所遺跡群は、京都府竹野郡弥栄町の西端にあって、ニゴレ古墳の所在する丘陵の谷奥部に位置している。この遺跡は、主として六

と十三世紀の生産遺跡のほか、二四基からなる五世紀末から六世紀後半までの古墳群で構成される。

このうち、生産遺跡は、

奈良時代後半から平安時代にかけての製鉄炉が中心で、

一九九〇年度までの調査で、

須恵器登窯四基、製鉄炉八

基を確認している。その中には、六世紀後半にまで遡る可能性のある製鉄炉も一基確認しており、わが国の鉄生産の開始時期や伝播過程をはじめとする古代鉄生産の全体像を考える上で重要な遺跡となっている。

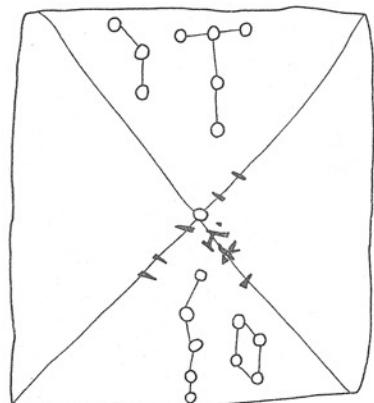
一九九一年度の調査区では、奈良時代後半の鉄滓捨て場と考えられるところの下層から、六世紀後半頃の堅穴住居が何度も建て替えられた状況で確認された。この調査区では、堅穴住居の床面で硬く焼け縮まつた炉壁と思われるような焼土塊もいくつか出土しており、古墳時代後期に鉄生産のための鍛冶炉が存在した可能性もでてきた。

木簡が出土した調査区は、これらの住居跡や鍛冶炉が検出されたところよりも少し谷部に当たる。遺物は、谷部の中央を流れる流路や、五本の支流から出土した。

出土した遺物は、須恵器・土師器といった土器類のほか、石製・土製の紡錘車、砥石、大型石錘、叩石、凹石、織機の一部、琴柱、下駄、木製農具、建築部材、木の実、貝殻、獸骨、勾玉、切子玉といった生活関連用品が多い。木簡が出土した遺構面は、これらの出土遺物の年代観から見る限り、ほぼ奈良時代後半頃と考えられる。

- 8 木簡の篆文・内容

- (1) (符籤)



出土木簡略図 ($S = 1/2$)

この木簡は、奈良時代末頃の流路内で見つかったもので、形態的には両辺の長さにあまり差のない長方形を呈している。中央に孔があいていることから、何か細い棒のようなものを突き刺して用いた可能性がある。中央の孔から各四隅に対し刻線を引いて四分割しているので、あるいは棒に刺して回転させたのかもしれない。用材には板目材を用いている。

文字らしきものは、この線上に沿って數文字分あることはわかるが、判読することはできなかつた。四分割した内、短辺側の両方ともに星宿のような文様が見えている。これが何を表現しているのかは不明であるが、この木簡と共に伴した遺物の中にミニチュア土器や土馬があることから、何らかの呪術や祭祀に用いた可能性が高い。したがつて、現時点では何らかの符籤と考えておく。

なお、木簡の釈読については、奈良国立文化財研究所の綾村宏・渡辺晃宏氏、神戸大学大学院鈴木景一氏のご教示を得た。
(土橋 誠)